
月亡：アルタード

M R B

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月亡：アルタード

【Nコード】

N2391H

【作者名】

MRB

【あらすじ】

”Alterred”の名の通り『改』。以前ここにあつた物を書きなおした物。つい最近になって、物語の骨組み自体に欠陥が見つかったので、没になりそうな文。全体から見た一話部分だけ、だけど、青春小説っぽく見えなくもない。

県立柴賀東高校教室棟三階、二年三組。

四月も半ばを過ぎた十七日目、教室の窓から見える空は、どこまでも晴天だった。

春の適度な気温と湿度に微睡みを覚えつつ、俺は校門横の桜の木を見下ろしていた。全国的に遅咲きらしい桜は、ちょうど今日に満開のときを迎えていた。

俺は桜の木に視点を定めたまま、教室の中に意識を向ける。

教室は休み時間ゆえの活気で満ちていた。男子グループのひとつが、少年週刊誌で連載中の漫画について独自の持論を交わし合い、その横で女子グループのひとつが、昨晚のバラエティ番組に出演していた芸人のネタを再現して笑っているのが聞こえてくる。教室の中は無秩序に騒がしいようで、いくつものグループや派閥がそれぞれの塊を作っていた。何人かは、互いに相談しながら黒板に次の授業の古典の課題を板書している。

そんな中、俺はいずれの会話の輪にも参加していなかった。誘ってくる人間もあまりいない。自ら会話に加わるうとしていない俺にわざわざ話しかけてくる人間とさえ、教師からの事務的連絡を伝えるにやる学級委員か、教壇の端で古典の現代語訳をしている天然娘か、お節介な幼馴染みのいずれかだった。

俺は視線を教室に戻し、黒板上の時計を見る。次の授業まではまだ時間があつた。しばらくはこの喧騒も止みそうにないなど、込み上げてきていた欠伸の代わりに諦観の溜息を吐いた。

ふと、頬杖を突く机の上に影が落ちる。

「眠そうだね」

降ってきたのは、よく知った少女の声。噂をすれば、だ。見上げて確認するまでもない。

「ん、別に、いつもどおりだ」

よく通る、鈴の音のような声に適当に返しつつ、一応の礼儀として、俺は声の方へと向き直る。

「あ、そ。ならいいんだけどね」

言って、少女は空いている席に腰を下ろして俺の方を向いた。人懐っこい笑みを浮かべて、俺を見つめてくる好奇心を湛えた瞳。

活発な印象を与えながら少女らしさを失わない、癖のないショートヘア。邪魔にならないよう、前髪の左側が青いヘアピンで留められていた。周りに合わせて短めに詰めてある制服のスカートからは、脚が健康的な曲線を描く。幼馴染みで俺の友人であるお節介な女、楠遥香が、そこにいた。

「でもさ、衛ちゃんはいつても不機嫌そうな仏頂面してるじゃない？」

俺を愛称で呼ぶ唯一の相手が言うのだから、失礼な言葉でもそれは真実なのだろう。もっとも、自覚していることなので軽口で返しておく。

「は、もし喧嘩を売っているのなら買っぞ？ 何で勝負する？」

「しません」

俺の冗談を、楠は一言で切り捨てる。

「そうじゃなくて、もっと愛想良くしたら、って言ってるの。そんなに険しい顔してたら誰も話しかけてくれないよ？」

「そう言われても、他人に愛想よくする必要が見当たらないんだよな。話しかけてくる人間がいなくても静かがいい。俺にとってはプラス要素だ。友人の数も、現時点で不満はない」

俺の態度は変わらない。挨拶代わりに言っただけだったのだろう。楠も肩をすくめるだけで、それ以上は言っただけだった。

思いついたように楠が立ち上がり、窓から上半身を乗り出す。

「校門の桜、綺麗だね」

「落ちても知らんぞ」

俺の忠告も届いていないのか、敢えて返事をしないでいただけなのか、楠は先ほど俺が見ていた満開の桜を見て感嘆の声を漏らしていた。へアピンが陽光を反射して安っぽい光を放つ。

楠の奇妙な様子に、数人の生徒が視線を向けはじめ。気の所為か、そのほとんどが男子であるように思えた。目が合った男子が、やましいことでもあるかのように目を逸らした。教室に残されている楠の尻を見て、その理由に気付く。

「なあ楠、俺としてはどうでもいいんだが」

よほど桜に見とれているのか、俺の呼びかけにも楠は振り返るだけで反応する。

「見えてる」

「なにが……あ、ちょ、うわっ！」

疑問符を浮かべていた楠の表情が反転。乗り出していた上半身が、跳ね上げられて教室に帰還。疾風の速度でスカートを抑え、そのまま屈みこむ。すげえ背筋力だ。

真っ赤になつた楠が、ゆっくりと顔を上げて睨んでくる。

「見た？」

「見えてない、興味が無い。それに、どうせ今日もスパッツ着用だろうが。見えるも見えないもあるのかよ」

「見えたのが下着じゃなくても、恥ずかしいものは恥ずかしいの！」「ばん、と叩かれた机が音を立てた。うるさい。」

「お前さ、言ってることと行動が矛盾しまくり。せめてもう少し女の子らしく、そう、たとえば……」

適当な例を探すべく、俺は教室を見回す。しかし名字すら覚えていない人間がほとんどなので、条件に当てはまりそうな人物はおのずと限定された。俺は黒板の前にいる女子を顎で指す。

「……片岸でも見習ったらどうだ？」

「綾ちゃん？」

あやな

かたぎし

片岸綾菜は古典のテキストを片手に次の授業の板書を行っていた。自分の名が聞こえたのか、作業を中断して振り返る。

「あー、なんでもない。気にせず続けてくださいな」

茶色味がかつたセミロングの髪を揺らして、片岸は小首をかしげて見せた。そして、楠の姿に気付いたらしく手を振ってくる。楠も苦笑しながら手を上げてそれに返す。

楠の反応に満足げな笑みを浮かべ、片岸が作業に戻っていく。先の疑問などもう忘れてしまったのか、変わらぬ様子で板書を再開していた。

片岸の小動物のような仕草は、良い意味で女の子らしい。たとえ人によっては反感を買うような行為でも、無条件で許したくなってしまう無邪気さがあった。それは彼女の性格が為せる技なのである。う。天然とは恐ろしい。

俺も片岸の気にやられたのか、さっきまでのことがどうでもよくなってきた。楠も同様の顔をしていた。

時計を見る。次の授業まであと五分。俺は制服のネクタイを緩めて立ち上がる。カバンから厚手のスポーツタオルを取り出す。

「どこ行くの？」

「顔洗って眠気を飛ばしてくる」

雛鳥のように付いてこようとする楠を残し、俺は教室の喧騒から抜け出す。

廊下に出て、トイレに向かう。到着。

首からタオルを下げ、蛇口をひねる。眼鏡をはずし、両手で水をすくう。水面が鼻先に触れた。冷たい。

顔を拭き、眼鏡を装着する。正面には鏡に映った俺の、城凧衛輔たちなきえいすけの顔があった。

無愛想と形容される表情はいつもどおり。眼鏡の奥の瞳は溟くら。気だるく細めた目が、不機嫌そうな印象をより濃くしていた。

鏡は嫌いだ。見れば必ず、自分の顔の目元に、口元に、髪に、姉の面影を見つけてしまう。それに気付く度、締め付けるような郷愁が痛みとなって奔り抜ける。

だが、それでいい。

鏡を見ながら、自嘲気味に笑ってみせる。少しだけ恥ずかしくな
って、人が見ていなかったか周囲を確認する。何をしているんだ、
俺は。

教室に戻る。席に着いたところで、ちょうど予鈴が鳴った。しば
らくして教室に古典の教師が入ってきて、課題が板書されているこ
とを確認してから授業を始める。

真面目に授業を受けるかどうかは別として、俺は教科書とノート
を取り出す。

片手でシャーペンを回しつつ、窓から外を眺めた。眠気は退いて
いた。

机と椅子が除けられてできたスペースを機械的に掃いていく。塵
取を持ってきた男子 たぶん笹木ささきに残りのゴミを任せ、俺は
妙な落書きが施された机を運ぶ。運びながら、俺は別のことを考え
ていた。

桜。季節が一巡して、また春が来た。

一年前、高校生になったのを境に、俺は独り暮らしを始めた。そ
う言くと大概の人は、親から独立してどこかに部屋を借りていると
いう像を想像するのだろうが、俺の場合は少し違っている。

この柴賀東高は地元の高校なので、新しく部屋を借りる必要がな
い。ここの生徒のほとんどがそうであるように、俺も自宅生である。
それなのに俺が単身生活をしているのは、主に両親の仕事の関係、
それと姉のことだった。

今でこそ家には俺一人しか住んでいないが、城凧家はさしたる問
題も無く、仲の良い家族だった。構成は俺と両親と姉の四人家族だ
った。

新聞記者だった母は、俺の進学を機に各地を転々とするフリージ
ャーナリストに転向した。外国にも取材に行くという仕事柄、家に
居ることの方が圧倒的に少ない。半年に一度は帰ってくることにな
っているのだが、ひと月もしないうちにまた出掛けていく。そんな

ワーカホリック
仕事中毒のような生活を送っている。また、母は批評家として活動していた時期もあった。そのときに出版した本は近所の書店で時々見かける程度には有名。俺もときどき参考にさせてもらっている。父は大手の製薬会社に勤務しており、二年ほど前に京都に転勤して、現在は京都にて単身赴任中の身。詳しくは知らないが、毎月通帳に振り込まれる額からしてなかなかの役職に就いているらしい。月一程度の頻度で電話もよこしてくる。

もう一人、俺の三つ年上の姉は、勉強にしろ運動にしろ人付き合いにしろ、何かと器用にこなすタイプだった。そう言っても、彼女は天才肌というわけではなく、人が見ていないところで地道に努力をする努力型の人間だった。そんな姉を俺は尊敬していたし、なにより姉として慕っていた。

三年前、あんなことが起きるまでは。

忘れられない、忘れることなど許されない、自分の無力さを嫌というほど痛感した三年前の記憶。それを思い出すたび、あのころの自分は本当に何もできなかったのか、何か出来たのではないのか、という思いが今でも胸をきつく締め上げる。

運んでいた机から倫理の資料集が落ち、現実を引き戻される。

……止めよう。これ以上は気分が沈むだけだ。

それに、生きている人間のことを死人のように語るのも良くない。事実、姉は遷延性意識障害、俗に言う植物状態にあるだけで、死んだわけではない。治る見込みがほとんどないと医師に言われようと、可能性はゼロではない。

悲観していても何も始まらない。俺は俺なりに、この現実を生きるだけだ。後悔や苦悩があっても、それが俺の日常だ。

目を閉じて、開く。思考を切り替え、落ちた資料集を拾う。何気なく見ると、丁度ソクラテスのページが開かれていた。『臆見』や『無知の知』などの単語が目に入る。教師が中間考査に出題すると言っていたのを思い出した。だが内容をさっぱり忘れていた。あとで復習しておこう。

周りの作業が停滞しないように、資料集を机の中に戻す。

そういえば、夕食の献立を何にするか考えていなかった。家の冷蔵庫に何があったか、記憶の網を手繰り寄せる。思案の末、賞味期限の切れた長ネギくらいしかなかったことを思い出す。さらに今日は二十一時からバイトが入っていたことも、一緒に思い出した。一食くらいは抜いても問題ないが、バイトがあるとなると話は変わってくる。

急いで机を並び終える。時間を確認し、安堵の溜息が漏れた。ヤスオカのタイムサーブスに行くにしてもまだ余裕があった。

閑散とした教室の、自分の席に腰を下ろす。

校庭を見下ろすと、坊主頭の野球部が列になって走っているのが見えた。特にすることも無くなったため、カバンを担いで教室を後にする。

「ありや、今日はもう帰るの？」

清掃から帰ってきた楠が、俺の姿に気付いて声をかけてきた。俺は自転車の鍵を玩んでいた指を止める。

「ああ、夕食の食材を買いにね。特売品があればよし、なければ半額になった惣菜でも買っさ」

「その晩御飯つてさ、もう決定事項？」

「あー？別に、そんなことはないけど」

何か言いたそうな楠の様子に、俺は続きを促す。

「ええと、早い話が夕食のお誘い？ さっきお母さんからメールが来ててさ。今晩一緒にどうかなー、つて」

「またいきなりだな、お前のお母様は」

俺は夕食の献立を考え作る手間と、おばさんの厚意を天秤にかける。結果、圧倒的優位で後者が勝利。

申し出を受けようとして、唇が紡いだのは正反対の言葉だった。幸せな夕食の風景が、俺には何故か遠く、触れ得ざるもののように感じられた。

「いや、おばさんの厚意に甘えたいところだけど、実は今日はバイ

トがあつてな。悪いが、また今度にしてくれないか？」
「ふうん……衛ちゃんのバイトつて、確か九時からじゃなかったっけ？」

俺の意図を見越したかのように、楠が疑いの眼差しを向けてくる。長い付き合いで互いのことをほぼ知り尽くしているとはいえ、楠は鋭い。

溜息をついて、楠は俺を責めるような口調になる。

「心配しなくても、それに間に合うようにお開きにするから」
「いや、だが……」

言い渋る俺を見つめる楠は、出来の悪い弟を見るような目をしていた。

「まさかまーた、自分にはそんな幸せは身分不相応だ、なんて考えてるんじゃないでしょうね？ もう、変な所で変な意地張ってないの」

図星だったわけではないが、なぜか何も言い返せなかった。

「ほらほら、なるべく早くお母さんに返信しなくちゃいけないし、来るの？ 来ないの？」

早口で捲くし立て、顔を近づけてくる楠の勢いに、俺は圧されてしまう。

「わ、かった。行くよ、行きます！ だからそんなに寄るな、鬱陶しい」

「それでよし」

満足げに笑顔を咲かせ、楠は携帯を取り出す。取り出した携帯の画面を見て、表情が一変。

「げ、もうこんな時間！？ 衛ちゃん、私、用事があるからまたあとでね！ あ、七時からだから遅れないですよ？」

言つて、楠は自分のカバンを引っ掴んで教室を飛び出す。返事をする暇もなかった。慌ただしい奴だ。

残された俺も、歩いて駐輪所へ向かう。

駐輪場へ向かう間、俺はなんとなく考えてみる。俺と楠との会話

はいつもこんな感じだ。意見が合わず言い争いになることはあつても、次の日には何が原因で喧嘩をしていたのか、二人とも忘れていく。簡潔で、互いに深くまで干渉しないところ、それが異性同士でありながら、友人として付き合いが続いている理由だろう。

青春らしい恋愛感情などありはしない。女らしさという概念がフエードアウトしつつある楠に恋をしろ、というのも無理な話なのかもしれないが、アレはアレで彼氏持ちだったりする。噂によると楠の隠れファンという奇怪な連中が存在するらしい。世の中は不条理だ。

まあ、俺とあいつとの関係を敢えて言葉にするのなら、腐れ縁という言葉が最も適当だろう。腐れ縁、うん、悪くない響きだ。

玄関で靴を履き替え、駐輪場に到着。俺は小型の音楽プレイヤーにイヤホンを接続し、自転車に跨る。指でプレイヤーを操作して、お気に入りの歌手の曲を再生。クラシック調の洒落たメロディーが流れ、世界に音が満ちる。

鞆を自転車のカゴに放り込んで、ペダルを踏み込む。唇がうる覚えの歌詞を勝手に紡いでいた。

「それでえ、その男が言うわけえ」「攫われて、人気のない場所で内臓をぐちゃぐちゃにされて殺されちゃうんだって!」「単純な授業のつまらなさなら世界史の本木もせつきなかなかだぜ」「それって例の誘拐殺人?」「怖い話って言えば、柴賀東の怪談って知ってるか?」

屋上に出る幽霊の話」「そうそう、噂だと、死体が発見された場所にはびつちりと血で文字が書かれてるとか!」「なんかココの生徒が自殺したってやつ? 知ってるよ、アレって嘘なんでしょ?」

「っーか体育のあのタコ、マジでウザいんですけどー」

窓を閉め切った教室に男子の罵声や女子の黄色い声が反響する。ランチタイムを静かに過ごすためには空き教室を使うしかないのだが、いまさら空いた教室を探す労力も惜しい。だからと言って、ごった返す食堂などもってのほかだ。

諦観の溜め息を吐きながら、俺はコンビニの唐揚げ弁当をつつく。どうでもいいが、揚げ物は揚げたてを食べたいね。

窓の外は、晴天だった昨日が嘘だったかのように暗かった。昼前から雨も降り出している。落ちた雨粒が、遙か下のアスファルトにそれぞれの波紋を描いていた。

今朝は急いでいたおかげで傘を持ってきていない。帰りはバスか電車を利用するかしないと、家に着く頃には爪先までしっぽり濡れてしまっただろう。ああ、学校を出てから家に着くまでの間だけでも晴れてくれないだろうか。

「それで、お隣の coronちゃんか、って衛ちゃん私の話聞いてる?」

「聞いてないし聞く気もない」

俺は寄せ合った机の向かい側に座る楠に答える。愛想の無い返答に楠がむくれる。楠の隣の片岸が、のほほんとした様子で弁当を口に運んでいる。

「嘘ウソ。で、あの犬がなんだって?」

「……ま、いいや。ええとあの子、犬種は確かグレートピレニーズだったよね?」

言われて、モフモフの白くて大きい犬が俺の脳内で再生される。

俺も何度かその犬に会ったこともあったため、疑問に首肯しておく。「あんまりおつきいから散歩とかご飯代とか大変なんだって。お行儀は良いから、まだ良いんだけどね。昨日も顔中をべるべる舐められちゃって」

「はー、おつきい犬って可愛いよね、むぎゅってしたくならない?」

楠の言葉に、片岸がややズレたコメントを返していた。俺は弁当を食べ終わる。立ち上がって、空になった容器を捨てに行く。面倒くさいが、プラスチックと割り箸は分別して捨てる。

再び席まで戻ると、二人とも弁当箱を片付けていた。片岸が職員室に用事があるから、と教室を出ていき、喧騒の中に俺と楠が残る。「衛ちゃんは?」

「何が?」

空は泣き止む気配がない。しかもいよいよ本降りになってきていた。

「これから授業まで。まだ時間あるしー」

「どうもしないさ。体力の温存に授業をテキストに受けて、生徒会は……どうするかな」

「ああ、朝間あさまくんと呼ばれたんだ。仲いーもんね」

座ったまま、伸びをして眠気をはらう。欠伸が喉の奥まで登ってきていた。

「臨時要員というのも楽じゃない。三年の中島 先輩が体調を崩して今人手が足りない。状況を鑑みると、正直行きたくない」
「ふーん、でもトモダチの頼みなんですよ?」

俺は我慢できずに欠伸を漏らす。

「行かないとは言っていないだろう。生徒会に協力することで、教師から目を瞑ってもらっている部分もある。夜間の小遣い稼ぎなん

かがそうだな」

俺は背もたれに体重を預ける。遠くで雷が轟いた。二度目の欠伸を噛み殺し、俺は言う。

「それに、俺は友誼というものを決して軽視はしない朝間、新宮、澤江、そして楠。……俺が友人と呼べる存在は今のところ四人だけだが、その存在に救われたことも往々にしてあった。そしてこれからもあるだろう。だからこそ、俺は約束は破らないし、頼まれ事も受ける。ま、それ以外の連中は知ったことではないがな」

「トモダチ、ねえ……そういうところは律儀だからね、衛ちゃん」
楠が少しだけ寂しそうに笑む。

俺の認識では、学内に限らず、それなりの親交がある人間や、友達や友人は知人。そのほかはただの他人だ。知人までは愛想や義理も使うが、他人はどこまでも他人だ。

「それに、一度引き受けたからには責任がある。無責任に投げ出すことはできんからな」

湿った空気の教室に、昼休みの終了を告げる予鈴が鳴り響いた。

生徒会庶務課の活動場所である放課後の情報室、隣の印刷室、信号を受信した印刷機が駆動。用紙に電子の情報を現像しようとして、停止。本日六回目になる甲高いエラー音が鳴り響く。

「また紙詰まり……城凧くん、少しだけ手を貸してください」

「少しばかり待て。俺の手は二本しかないのだ」

壁一枚隔てた印刷室から、印刷機の異常を示す警戒音と友人の朝間和明の声が聞こえてきた。同程度の音量で返しながら、左手に持った文庫本を閉じる。表紙の『城凧瑞希』という著者名が目に入った。母の名前だ。

床に散り乱れている書類を踏まないようにしながら、それらを整理している古川を残し、隣の印刷室へ向かう。

埃臭い印刷室。正確にはこちらは第二印刷室で、生徒会や部活関係の印刷物を取り扱う。第一印刷室には、試験の答案などを印刷す

るため、生徒は立ち入ることができない。

壁際には印刷用紙が入った段ボールが積まれており、長机の上には印刷に失敗して片面が潰れた紙が散らかっていた。旧式の大形印刷機が一台だけ、部屋の奥に鎮座していた。

俺は印刷機と睨みあう朝間の背中に話しかける。

「朝間、調子はどうだ？」

「何度やっても駄目ですね。紙はそれなりの物を使っているし、プリンターの中だって掃除したばかり。城風くんには見てもらった方が早いと思います」

お手上げだ、と言うように、朝間は印刷機のインクで汚れた両手を見せてきた。

「原因は紙質でも汚れてもない、か。どれ、見てみよう」
「頼みます」

朝間と入れ替わり、噂の問題児いんさつきと対面する。とりあえずカバーを開いて、詰まった印刷紙をなるべく丁寧に取り出す。

しばらく調べてみて、やはり目立った問題が無いことを確認する。カバーを閉じると印刷機が再起動する。注意して聞くと、駆動音に砂を噛んだような音が混じっていた。俺は結論を出す。

「専門家ではないから正確なことは分からんが、寿命という線がいちばん強そうだな、こいつは」

「たぶん、その予測は正しいでしょう。はあ、やっぱり買い変えなくてはダメなんでしょうか？ 今月は、生徒会の予算ももう底を突きそうなんですけどね……」

素人にしては観察力に優れると自負する俺が故障の原因を判断し、素人にしては電気製品に強いと自称する朝間が実際に修理してみる。簡単な故障なら、今までもこれで何とかなっていたのだが、こればかりはどうしようもない。

「ま、そちらは俺の管轄外だ。うまいことやってくれ」

「気楽でいいですね、城風くんは」

「は、つくづく正式に入っていないなくてよかったと思うぜ。修理する

か新品を購入する予算の捻出に、第一印刷室の使用許可証の手続き、印刷機が使えない間も仕事は溜まっていく。雑務課の仕事は、考えるだけで頭が痛くなる」

「雑務課、言い得て妙ですね」

ただでさえ老け顔の朝間が、額に皺を刻んで溜息を吐いた。残業で疲れ果てた社会人のようだった。

朝間がのそのそと立ち上がる。その背丈は俺よりもいくらか大きく、肩幅も広い。しかし、俺にはその背中がやけに小さく見えた。

「仕方ないですね。職員室に行つて事情を説明してきます。城風くんは作業を再開しててください」

「なに、また何かあつたら言つてくれればいい。生徒会に興味は無いが、遠慮はするな」

「はは、頼りにしています」

人の良さそうな笑みを浮かべて、朝間が印刷室を出ていく。俺も印刷室を出る。

喉が渴いていたので、情報室へ戻る前に食堂で飲み物を買つてくることにする。

途中の廊下では、雨で校庭を使えない陸上部がトレーニングをしていた。雰囲気的に通りにくいので、迂回して食堂に向かうことにする。

数十分ほど前の電車でほとんどの生徒が下校したためか、日中に比べて校舎内は人通りも少なく静かなものだった。聞こえるのは静かな雨音と、熱心な吹奏楽部員の練習の音くらいだった。

食堂に着く。自販機に五百円硬貨を投入して、缶の緑茶を買う。

気まぐれに、朝間の分の微糖の缶珈琲と、情報室に残っている古川の分の『正午の紅茶』もまとめて買って置く。作業をしながら飲むと思ひ、情報室へと引き返す。

来た道に戻りながら外を見た。窓の外は相変わらずの雨だったが、東の空が少しだけ明るくなっていた。うまく時間を合わせれば、晴れ間に帰れるかもしれない。

そんなことを考えていると、丁字路で少女とぶつかった。互いに速度は無かったので肩が触れた程度だった。

「っと、失礼」

「こちらこそ、ごめんなさい」

互いに軽く会釈し、非礼を詫びる。

少女が顔を上げる。流水のような濡羽色の長髪が印象的だった。

白い肌に、凜とした顔立ち。どことなく清楚な雰囲気醸す少女は、可愛いというより美人と形容した方が適当な気がした。

見覚えのない顔なので他学年の生徒かと思ったが、少女の着ている制服もまた、見覚えのないものだということに気付く。柴賀東の女子生徒と同じブレザーだが、赤いリボンが無かった。

多少気になったが、好奇心を剥きだしにして尋ねるのも失礼な行為かと思い、そのまま何事も無かったかのように彼女の横を抜ける。抜けようとして、少女に声をかけられる。

「あの、すみません」

「はい？」

向こうから声をかけてくるとは思っていなかったため、頓狂な声が出た。

早く戻りたいという気持ちもあったが、無視することもできない。足を止めて少女と向き合う。

「何か？」

「ええと、その……」

少女は言いにくそうに言葉を詰まらせる。改めて見た俺の雰囲気、予想以上に話しかけづらいものだったから、というわけではなさそうだ。

「……職員室へは、どうやって行けばいいんでしょうか？」

「職員室？ そういふのは俺に聞くより事務室に行った方がいいと思うが、まさか校舎内で迷ったのか？」

返した言葉に、少女は恥ずかしそうに首肯した。

柴賀東の校舎は、創立時から何度か増築工事が行われたため、他

校と比べても作りがややこしい。初めて訪れる人間は、案内か地図が無ければ大概は迷う。彼女の場合は、迷った時にたまたま現れたのが俺だったのだろう。

俺はすぐさま記憶している校舎の地図を呼び出す。

「職員室なら、君が今来た道を引き返して、突き当たりで左折し、左手に見えてく階段で二階に上がって右へ。最初の角を左折し、直進の後に突き当たりを右折すれば、目的地に到着する」

「え、ええと？」

「戻って右、階段で二階、右、左、右だ。ややこしいだろうが、それが一番の分かりやすい経路なんだ。なんなら、そこまで案内してやってもいい」

なるべく早く情報室に戻りたいとはいえ、作業が特別に困窮しているということもない。初対面の相手になら、一度だけは親切にしてやってもいい。

しかし、少女は俺の提案を笑顔で拒否した。

「いえ、お急ぎのようですし、道順も分かりました。どうもご親切に、ありがとうございます」

そう言って、少女は恭しく頭を下げる。

「そうか。なら俺はもう行こう。じゃあな」

今度こそ、俺は少女と別れて情報室に向かう。角を曲がって、彼女の姿が見えなくなる。

いまさらだが、互いに名乗るのを忘れていたことに気付いた。まあ、わざわざ追いかけるほどでもないし、別にいい。

左腕の時計を見る。ふむ、予想以上に時間を食ってしまったらしい。こりゃ古川はおかんむりだな。

歩きながら缶のプルを開け、口をつける。口内に緑茶の程よい苦みが広がる。情報室に到着する。

「遅い」

扉を開けると、残って作業していた女子、古川理恵ふるかわりえが睨んできた。そこそこの容姿が可愛いために、結構な迫力があつた。

俺は無機質な情報室を見回す。朝間はまだ戻っていないようだ。た。

ポニーテールを揺らして、古川が散らかった書類を分類しつつ拾い集める。床にまで広がっていた書類が片付いていることから、俺がいない間もそれらを分類、整理をし続けていたらしい。

「言われなくとも、すぐに作業に戻るさ」

古川は、なら早くしろ、と言わんばかりにそっぽを向く。やはり不機嫌らしい。

彼女の不自然なふうに尖った態度に、俺は少しだけ沈んだ気持ちになる。思い当たるものが、俺には二つばかりあった。

一つ目は、単に俺が断り無く情報室を離れていたこと。二つ目の理由は、二週間ほど前から生徒会で耳にするようになった噂だった。よりもよって庶務課副課長の、朝間和明についての噂である。

思えば発端は何だったか……ああ、思い出した。確か、朝間と仲のよかった同学年の女子が、学期も早々に不登校になったこと、だったはずだ。

個人的には、名前も知らない人間のことであったし、個人的に深入りしたくない空気を早々に感じ取っていたためほとんど記憶にも残っていないが、それを聞いたのと似たような時期から、朝間の言動に奇妙なものが目立つようになったのを覚えている。

生徒会の間でどのようなことが噂されているのか、詳細を掘り出すつもりは毛頭ない。中には朝間の人格を無視した、聞くに堪えないものすら存在していると聞く。俺も知らない噂の真偽は、この際関係無いらしい。

噂のというのは存外に侮れない。それは質たちの悪い流行り病のようなもので、特に、間違ったそれを社会の大多数が信じてしまえば最後、真実をも捻じ曲げて、ありもしない噂の方を『周知の事実』に変えてしまうことすらあり得る。しかも感染速度が異常に速いという特性もある。現に、ゴシップで失脚した芸能人や政治家は数え切れない。

俺は朝間が言っつてこない限り、気が付かない演技を続けられるので、まだいい。だが、最近になって噂を耳にした古川までが、情緒不安定になっているのは気にかかった。

注意散漫、挙動不審などは心配事の二つや二つを抱えている人間にとつて、なんら不思議ではないものだ。しかし、今回は朝間の人格がそれで終わらせない。

朝間は俺と仲がいい理由がよく分からなくなる程に、普段は糞に糞を累乗したような糞真面目なのだ。そんな朝間が、十分に一度は授業中だろうとお構いなしに携帯の画面を確認している、課題を忘れてくる、話の途中で上の空になる、などと聞けば誰もが不思議に思う。そんなあり得ない朝間の態度が、噂の真偽をより霞がかったものにしていった。

噂と、朝間の言動。本人なら知っているのだろうが、迷いを断ち切るように作業に没頭する朝間に、空気を読まずに聞き出すのは当然ながら憚られた。

古川が苛立っているのは、そんな朝間の様子に底知れぬ不安を覚え、自分ではどうすることもできない無力感に苛まれているからだろう。やや的外れな気もするが、溜めて矯めて、それで心が病んでしまうよりよほどいい。古川の性格についても、ここで言い咎めるべきではない。

「おい、古川」

呼びかけに古川が振り向く。俺は今もどこか辛そうに見える彼女に、温ぬるくなつてしまった『正午の紅茶』を投げ渡してやる。飛来するボトルを慌てて受け取る古川。

小言を言われる前に、俺はそそくさと待機状態になっていたパソコンを立ち上げ、文章ファイルを開く。画面には資料用の本から引用した文字列が表示される。近くに朝間の分の珈琲の缶を置く。

思わぬ差し入れに叱責を保留したのか、予想していた古川の小言は無かった。その代わりなのか、なにやら不吉なほど大量の紙の束を運んできて、俺の使っている隣の机に置く。あまりの重みで金属

製の机が軋んだ。見上げると、古川の極上の笑顔。

うえ、これ、俺のノルマ？

呆然とする俺の肩を叩き、追加の仕事を与えた古川はボトルに口をつけつつ勤めに戻っていった。情報室の隅の方から、微かながら鼻歌まで聞こえてくる。幾分か機嫌は直つたらしい。

俺は隣の机の上に積まれた、文字通りのプリントの山を見やる。

文句を言っても、ノルマは減ってはくれない。ある意味、古川は俺に汚名を返上する機会を与えてくれたのかもしれない、と俺は自らの思考を少々無理のある方向へ誘導しておく。

「さて、それじゃ始めますか」

遅れた分を取り戻すため、俺は気合を入れた。

「おや、城風くんはどうしました？」

雨も上がり、間もなく完全下校時刻になろうとしている頃、朝間あさま和明は事務処理から解放され、情報室に戻る事ができた。

「城風くんなら、あれだけの仕事をこなして、さつき帰っちゃったよ。どうせなら、もうちょっと増やしておけばよかったかも。あ、これ、城風くんから」

ようやく帰ってきた和明に、同輩の古川理恵ふるかわりえが穏やかな笑顔で缶珈琲を差し出し、卓上に積まれた書類を指さす。

「ありがとうございます。城風くんはさすがですね。正直、正式に庶務課に入ってくれないのが残念で仕方ありません」

城風衛輔という友人が、未だ誘いを拒否し続けていることを心底悔やむ言葉に、理恵がどこか慌てた様子で付け加える。

「あ、でも、彼ってどこか変わってるよね。不真面目なようで真面目だし、なんか壁作ってる感じがあるし。朝間くん、なにか知ってない？」

「はは、あんまり彼のことを悪く思わないでください。いろいろあるんですよ、彼には」

理恵の発言を、和明は優しく言い咎めた。和明が続けるが、その

意図には気付かない。

「ぼくも詳しくは知りません。確かに、彼は自分のことを話したくないところがありますから、ぼくも無理に聞こうとは思いません。いずれ彼から話してくれることがあれば、ぼくはその話を真摯に受け止めますよ」

和明が息を吐いた。そして、情報室の片付いた様子を眺めて言う。
「古川さんも、こんな時間までお疲れ様です。あれだけプリントが散乱していた情報室も随分きれいになりました。これで先生にも小言を言われなくて済みそうです」

「え、わ、私は、私の分の仕事をしただけだから」

「いえ、謙遜しなくても結構ですよ。ぼくから見ても、あなたはがんばってくれている。要領もいい」

和明の言葉に、彼から見ても不自然なほど理恵が取り乱す。和明にはその理由が分からなかったが、おそらくは急に彼女の話をしたからなのだろうと、半分しか正解していない解答を出しておいた。

「朝間くん、あの、この後なんだけ」

理恵が喋ろうとしたとき、ホワイトボード白板上のスピーカーから音楽が流れ始めた。喉元まで出かかった言葉が、完全下校時刻五分前の校内放送に阻まれていた。

「もうこんな時間ですか。古川さん？　どうかしましたか？」

「……なんでもない」

言って、理恵は自分の鞆を取りに踵を返す。和明はただ疑問符を浮かべていた。

理恵が消灯したのを確認し、和明が情報室に施錠する。廊下に明かりはなく、外からの微かな光が二人の輪郭を闇から切り取っていた。

「それでは、ぼくは鍵を返してきますね。古川さんは玄関で待つていてください」

「へ？」

科学的に幽霊の存在が証明されたという報せを聞いたかのように、

理恵が目を丸くする。つられて和明も同じくらいに驚く。

「ええと、ぼくを待ってこの時間までいてくれたのではないのですか？ いや、そうじゃなかったとしたら、今の発言は恥ずかしいですわね……」

「あ、違うちがう。じゃ、じゃあ玄関で待ってるから！ あ、なるべく早く来てよ！」

恥ずかしそうに頬を掻く和明に、古川は心から嬉しそうに答える。そして跳ねるように生徒玄関へ向かって行った。

取り残された和明は、独り職員室へと足を向けた。

和明には、理恵の内に何が起きたのかさっぱり理解できなかった。ましてや、この暗がりでも輪郭しか見えていなかった彼に、彼女の頬が薄っすらと紅くなっていたことを、知る由はなかった。

昼食の時間帯。本来なら生徒で溢れているはずの食堂も、休業日である土曜は普段の喧騒が嘘のように閑散としていた。授業は午前中で終わりなので、生徒は部活へ行くか帰ったのだろう。

財布から硬貨を取り出し自販機に投入する。何を買おうか迷っていると、背後から伸びてきた指が勝手にボタンを押した。指の主が取り出し口に手をつ込み、ジンジャーエールの釦を取り出す。

「いや、あの、楠さん？ アナタ様は人の金でいったい何をしていらっしゃるのですか？」

「ちょうど喉が渴いてたんだ」

メタリックブルーの髪留めで額を晒した楠が眩しいばかりの笑顔を咲かせる。会話がまったく成立していない。

軽く目眩を覚えた俺を尻目に、楠はプルを開けて缶に口をつける。楠の白い喉が動く。

「もう何を言っても無駄だと思うけど、それ、人として結構アウトじゃないのか？」

「細かいコト気にしないの。男の子でしょ」

「今となつては別に構わないが、それをお前の方から言われると何故だか倍以上に腹が立つな」

脱力の溜め息を吐きつつ、もう一度硬貨を投入する。しばし迷った挙げ句、俺は無糖の缶コーヒーを購入する。缶を開け、黒色の液体を口に含んだ。カフェインの苦味が、申し訳程度に眠気を払う。

楠の姿を探すと、日の当たる窓際の席に座っていた。俺もそれに習い、楠と向かい合って腰を下ろす。

暖かい沈黙の中、楠がおもむろに口を開いた。

「そついえば、生徒会でなんかあったの？ 風の噂で聞いたただけけど、庶務課だよな？ 衛ちゃんえいが助つ人に行ってるの」

まあ、朝間関連の事だろうが、相変わらず耳が早いこと。

「大方、情報の出どころは古川ふるかわと仲の良い朝日あさひか、アイツと同じ組の熊野くまのといったところだろう」

「正解は朝日さんね。最近、古川さんの様子がおかしいって。他からも相談されたんだけど、やっぱりなんかあつたんだ？」

口振りからすると、楠もあまり詳しくは知らないらしいが、しらを切り徹せるほどでもない。

こいつにどこまで話すか迷ったが、根拠の無い噂を無駄に広めるのはやはり賢明ではないと判断。適当に流す方針へと会話の舵を取る。

「噂と言っても、誰と誰が付き合った、というような根拠の無いモノだ。そんなものに流される方が馬鹿げている。忘れる」

「火のない所に煙は起たない、って言うけどね。本当はどうなの？」
しつこいな。

「答える気はないが、俺とお前の仲だ。一言だけ忠告しておいてやる」俺は続ける。「好奇心は、猫をも殺す。お前のその立ち位置は非常に危うい。続けてればいずれ自滅するぞ。……この件に、興味本位で首を突っ込むな」

軽くだが、俺は威圧しておくことにする。楠も俺の意を汲んでかそれ以上は追及せず、窓から校庭を眺めた。

ふと、楠の手からジンジャーエールの缶が離れていることに気付く。

「どうかしたの？」

「いや、なんでもない。それより、グラウンドの奥にある器具庫の前に、体育の山崎先生が居るのが見えるか？」

俺の指の先を辿り、楠が窓の外を見る。

「見えますね。校庭に白線を引いているみたいだけど、それがどうかした？」

「あの頭が、生徒にタコと言われる所以らしい。又聞きした話によると、以前柴賀東ちがひとうに在籍していた不良生徒と揉み合いになった際、

髪の毛を鷲掴みにされて引きちぎられたらしい。なんでも逆モヒカ
ンにされたとか」

「嘘でしょ」

俺は淡々と会話を続けながら、楠の視線を誘導する。その間、楠
の意識が離れた右手で、俺は無糖のコーヒーを静かに楠の缶に注い
でいく。楠は気付かない。

「いや、信じるか信じないかは勝手だ。しかし、あの先生にその話
をするとももの凄くご立腹なさるのは事実。以前、その真偽を確かめ
ようとした奴が、放課後に延々と説教を食らっているのを眺めてい
たことがある」

笑みを浮かべながら、楠が俺に向き直る。既に悪戯は完了してい
るので問題ない。

「……本当？」

「ああ、嘘みたいな嘘だろう？」

空気が固まる。

「そんなことだろうと思った。よく即席でそんな嘘を吐けるね。秘
訣を聞きたくなるよ」

「ん？ それは愛、かな」

「ペラペラな答えをどうもありがとう。どうしてすぐにバレるよう
な嘘を吐くかなあ？」

俺は楠の疑問を鼻で笑う。

「問われれば答えよう。俺の嘘は、相手が騙された事に気付いた時
の反応を楽しむ為のものだからだ」

楠が呆れの溜め息を吐き、それを椅子から立ち上がった俺が笑う。
唐突に楠が真面目な表情になった。人口密度の低い食堂に、どこ
か沈んだ声が響く。

「衛ちゃんは、いつも退屈なんだね」

「なんだ、急に？」

俺は椅子に深く座り直す。

「まあいい、たまには何かについて語るのも悪くない。……別に退

屈してはいないさ。それに、たとえ俺が実際に退屈であっても、俺はそれを悪だとは思わない」

「ふうん、どうして？」

楠が反応を示す。偶にはくだらない議論を交わすのもいいだろう。「本当に思むべきことは退屈などではなく、退屈で辛いだけの現実と向き合おうとせず、自らの立場や役割を捨てて幻想への逃避を選択してしまうことだ。現実から逃げ出したところで、辿りついた先もやはり現実。この世界に生きている限り、俺たちは現実からは逃げられず、それを受け入れなければならぬ。

確かに、現実は辛くて苦しいことで溢れているから、そこから逃げ出したくなる気持ちもいくらかは理解できる。だが共感はない」俺の内側の最奥から、不定形のなにかが染み出そうとしていた。気にせず続ける。

「痛みという単純な感覚でさえ、人間は他人と共有できない。痛みを感じることは自と他を切り離す自我形成の第一歩だ。痛みに限らず、『苦しい』や『悲しい』などの、脳に強く訴える感覚ほどいい。それに、痛い、辛い、苦しいと強く鮮明に感じるほど、俺は、生きていることを実感できる。世界に俺が存在していると認識できる」

「マゾなの？」

「水を差すな。俺は苦痛に性的興奮を覚えたりしない」

俺の一言一言が、内心から沁み出た黒い液体に濡れていく。

「苦痛は確実な事実。他は言葉でいくらでも虚飾かざれるが、苦痛だけは誤魔化しようのない、本人だけの真実であり現実だ。そこから逃げることは現実を、生きることを放棄することと同義。自殺など、最低の弱者の行為にすぎない」

「衛ちゃん、まだナオ姉ねえのこと」

楠の言葉に、握っていたスチール缶が歪み、黒い液体が飛び出す。「黙れ。その口、力で塞いでやつても良いのだぞ？ お前も暴力という痛みを感じれば、俺という人間が少しは分かるかもしれん」

「ちよっと、やめてよ」

「……冗談だ」

過熱していた思考を冷却させる。自分自身の言葉と内心に微妙な違和感があったが、俺はそこから目を逸らす。

楠遥香という人間は、俺の考えに理解がある方だと思っている。しかし、そんな楠との絶対的な隔たりとなっているのが、この現実との向き合い方だった。もっとも、いまさらその隔たりを埋めようとも思わないが。

「ね、衛ちゃん」

細く、若干の震えを含んだ楠の声。

「本当に、本当に辛いことがあったら、私に相談して？ 私じゃ、頼り無いかもしれないけど……」

「お前、俺の話を聞いていなかったのか？ 俺は無理などしていない。相談することなど、何も無い」

俺ははつきりと拒絶の意思を示す。俺は無理などしていない。していない、はずだ。

「しかし、退屈から随分と話が逸れたな。話題を戻すか」

胃の中で蠢く不快感を、何かを話すことで忘れようとする。楠はまだ憂いを含んだ目で俺を見つめてくる。やめる。

「……学生なんかに限られるが、退屈の源は日々繰り返される日常生活なのだろう。毎日の営みが同じもの、無難で平穏であればあるほど、それは苦痛となり得る。そういった退屈を除けるためには、日常の中に、ちよつとした非日常的な出来事が必要となる。日常からの逸脱、つてやつだ」小さく息を吐く。「ただ、いくら非日常的な出来事を望んでいても、それが単に非日常的なだけでは退屈を拭い去ることはできないだろうな」

「そうなの？」

やつと追い付いてきた楠に、俺は頷いて肯定する。

「たとえば最近、巷で噂になっている誘拐殺人事件を知っているか？」

「うん。人気のないところに連れていかれて殺されちゃうっていう、」

あれでしょ？ でもあれって、誰かが作り上げた与太話じゃないの？」

「違う。フィクションのような話だし、何故だかいずれのメディアも大きく扱っていないが、確実に、この誘拐殺人事件は実在の、しかも現在進行形の事件だ」

現職の警察官である新宮から聞いたものなので、間違いはない。

あの男は嘘を吐くような男でもない。

「話では、発見された時の遺体は腹を裂かれ、内臓ブチ撒かれていたらしい。こいつをどう思う？」

「え、どう思う、って？」

予想していなかった質問に、楠が言い淀む。

「犯人はどんな奴なんだろうな。男か女か、子どもか老人か、どうしてこんな酷い殺し方をするのか、そもそも本当に人間なのか、文字通りの『怪物』^{モンスター}なのではないか」

「怪物って、幻想への逃避は忌むべきものだって、さっき衛ちゃん言ってたんじゃない。それって矛盾してない？」

「逃避じゃない、これは遊戯だ。何の意味も為さない、ただの言葉遊びさ」

楠が顎に指を添えて黙る。しばらくして、薄紅色の唇が動く。

「たぶんだけど、衛ちゃんが言いたいののは、一言に非日常、って言うっても、その人の趣味とか、趣向に沿ったもので、それでいて適度な量でないといけない。それが求める刺激と違っていたり、強すぎる刺激だったりすると、ただの苦痛にしかならない……ってこと？」

「ふん。まあ、合格点はくれてやるう。ちなみに、お前は俺の言った『怪物』という言葉に何を感じた？」

「まず、『あり得ない』。それから、『本当にいたら、少し怖いな』って」

「そうか。分かりきったことかもしれないが、得体の知れない恐ろしい殺人者、というのはお前の趣味ではないということなのだろう。お前が言った通り、人によって求める刺激は千差万別なのだ。我が

儘なことにな」

「男の人って、割とそういうの好きだよな。衛ちゃんはどう思うの？　そういう『怪物』がもし現実にいたら、いま持っている悩みもいくつかはなくなると思う？」

今度は俺が考える番だった。

「……言った通り、俺は退屈を悪いことだとは思わない。が、現実になんかそんなものは必要ない。潤色せずに言うなら、なるべく人は死なない方がいい。殺人なんて恐ろしいことは漫画や銀幕の向こうだけでいいと思う。親しい人と会えなくなってしまうのは、誰だって嫌だ」

飾らずに言った俺の本音は、食堂の天井、壁に反射して消えた。

「……うん、そうだね。難しいな」

どこか思うところがあつたのか、楠が俯く。その視線はここではないどこかへと向けられていた。

「一方で、退屈を感じるとは平和の証でもある。戦争の直中では、退屈を感じる暇も無いだろう。退屈も、やはり付合い方次第ではそれほど悪いものではないのだろうよ」

我ながら言っていることが矛盾だらけだ。一息吐き、残った珈琲を飲み干した。時計を見る。

「さて、俺は行くが、お前はどうする？」

「どこに？」

「澤江の家。また変なモノを作ったらしいのでな、暇潰し程度にはなるだろう。お前も来るか？」

「私は私で用事があるから遠慮しとくよ。彼によろしく」

近頃は授業が終わると、楠はすぐに帰宅していることを思い出した。

「そうか。じゃあな」

「じゃーねー」

俺は空になった缶を持って立ち上がる。ああ、思い付いた。

「少しばかりだが、訂正しよう。現実には苦痛で辛いという考えは理

解できるし共感もする。時にはこのように休息も必要なだろう。だが、一時的に歩みを止めはしても、その場で蹲ってしまったり、そこから逃げ出したりしてしまうような真似はしない。絶対に、だ。誰が何と言おうと、こればかりは譲れない。苦悩し、痛みを存分に受け止めることが、この俺と言う人間の生き方なのだ。そこからは逃げられないし、逃げてはいけない。なに、ただの自己確認さ」

俺は踵を返し、静かな食堂を後にする。

この心に残る違和感も、俺自身が目を逸らしている矛盾点も、いずれ向かい合わなければならぬときが来るだろう。

ちよつと食堂を出たところで、楠が液体を吹き出す音が盛大に響いてきた。

だが、今はまだこの関係に、この世界に甘んじていよう。だから俺は、歪む口元を隠そうともせず、クラウチングスタートから全力で走り出す。

柴賀駅さいがえきからそう遠くない、安アパートの一室。転がる酒瓶、煙草のヤニで汚れた壁紙、放置されたインスタントラーメンやレトルトカレーの残骸……。

生活力皆無の中年男性に独り暮らしをさせたようなこの空間は、言うまでもなく我が家ではない。我が家であつてたまるか。

染みが目立つ畳に転がっているデジタル式の時計によると、あと一分で今日が終わろうとしていた。

……ああ、今日が昨日になつた。

沈鬱を吐き出し、萎んだ俺の肩に、するりと白い腕が絡められる。無駄に人懐っこい笑みを浮かべた淑女、もとい酔っ払い、もとい俺をこんな場所に軟禁している張本人が、呑みかけの発泡酒を片手にそこにいた。

「ちよつとお、聞かれんのお？」

眉間に細いシワを刻んだ自称妙齡の女が、微妙に呂律が回らない舌で話し掛けてくる。

こうして見ると結構美人なのに、その一挙手一投足がすごく酒臭いのは女としてどうなんだろう？ 時たま覗く胸の谷間や無防備な仕草も、健全な男子高生には少々刺激が強い。

「いいえ。ところで、いつになったら自分は解放されるのでしょうか？」

女は心底不思議そうな顔をして「なに言ってるの？ 今夜は帰さないわよ。ぬふゆふゆふゆふゆ」と、心底嬉しくない言葉と不気味な笑みをくれた。

俺の持つガラス杯にウーロン茶が注がれ、口いっぱいに裂きイカを詰め込まれる。受け取り拒否はできないらしい。クーリングオフも適応外ですかそうですか。

絶望消沈して俯くと、その動作を肯定と受け取ったのか、気分を良くした女が再び自分の初恋について饒舌に語り始めた。

もはや愛想笑いを浮かべる気力すら無くなった俺は、ガラス杯の水面に映る自分の虚ろな表情を眺めながら、ひたすらこんなことになった原因を考えてみる。

あれは今日、正確には昨日の夕方のことだった。

柴賀駅近くの繁華街。七色に輝くネオンや居酒屋の呼び込みの声が、日が沈んだ後も夜の浸食を妨げていた。

澤江にさんざん引き止められ、帰るのがすっかり遅くなってしまった。独り暮らしの我が家には門限が存在しないのだが、学校の制服を着て遅くまでうろつくのは問題だろう。

ふと、居酒屋の提灯がどこか誘蛾灯に見えた。俺が見ている間にもまた一人、頭にネクタイを巻いた冗談のような酔っ払いが中に吸い込まれていく。ある意味、人間も誘殺される羽虫とさほど変わらないのかもしれない、なんとなく思った。

前を向くと、出来上がっているおっさん達のグループがあった。それから逃げるように、路地に身を滑り込ませる。人混みは好きじゃない。

表通りから離れるにつれ、人の喧騒は反比例して小さくなっていく。少し遠回りになるが、裏道を通って帰ることにしよう。

街灯が少ない。建造物の隙間から空を見上げると、痩せ気味の月が笑っていた。冷たい夜風に体温を奪われ、身震いする。四月も終わりに近いとはいえ、まだ夜は冷える。

足元を影が滑走していき、驚いて跳び退く。よく見ると黒猫だった。

なあ、と猫が小さく鳴いた。

俺が姿勢を低くして手を伸ばすと、黒猫はどこことなく高貴な仕草ですり寄ってきた。寛大な猫らしい。俺の指が艶のある毛並みに触れる。俺が首輪の辺りを撫でてやると、くすぐったそうに金色の目

を細めた。

突如、路地の奥からけたたましい音が発せられた。何か倒れた音、空いた酒瓶が割れた音、その他多数。

驚いた黒猫が俺の手を離れ、音とは逆の方向の闇へと溶けていった。

「……あたたた」

次いで聞こえてきたのは女の声。目を凝らして闇の奥を見ると、闇と保護色のスーツで身を固めた女が、頭から生ゴミを被った状態で倒れていた。ポリバケツで躪いたらしい。

ピクリとも動かないので、さすがに怖くなる。近寄って、爪先で軽く突いてみるも、反応はない。

呼吸の有無を確認するため、頭に乘っていたバナナの皮を撤去すると、真紅のメッシュが奔った、ウェーブの掛った髪が露わになった。口の前に手をかざすと、初めて女が動く。

「んあ？ 誰、キミ？」

息が酒臭い。

「あー、大丈夫ですか？」

見た目からキャリアウーマンかと思ったが、頭に被った生ゴミ以上この女が酒臭い。相当呑んでいるな。

女が唸りながら身を起こし、壁に寄りかかる。

「ぐう、あんまり大丈夫じゃなさげ。キミ、ちょっとそこの鞆を拾ってくださいりゅ？」

指の差された先を辿る。そこには頑丈そうな外装のビジネスバッグがあった。ゴミを払い、外見に反してあまりに軽い鞆を女に差し出す。

「軽い……何が入ってるんですか？」

「んん？最後に残った希望とか、ひよつとしたら予兆とか？」

あなたがパンドラさんですか、とでも答えてもらええると思っっているのだろうか。無視して、俺は鞆を彼女に押しつける。

受け取った女は、鞆から水の入ったペットボトルを取り出し飲み

干した。

「ふん、それだけ喋れるなら大丈夫そうですね。それじゃ、俺はこれで」

「あー、どなたか存じませんが、親切なそこな方。アタシ、実はちよつと道に迷っちゃって、よかつたら道案内とかしてくださったりしません？」

この辺りの人間ではないのだろうか。ネクタイを緩めて胸元が露わになった女に、服の端を掴まれる。残念ながら、酩酊者の戯言に付き合つてやる義理はない。

「適当に歩いていけば、そのうち知つてる道にも出るだろ。で、そろそろ離していただけるとありがたいんだけど？」

「そんなツレないこと言わずにさ。美人のおねーさんがこんなコト言つてるんだよー」

女が黒いスーツに押し込められた胸を強調する。明らかにからかわれているが、知るか。女の無垢な笑みに悪意は無いようだが、それに乗るほど俺は安い人間ではない。

「むう、じゃあこうしよ？ キミはタクシー。アタシはお客さーん。運賃は、うーんと……」女は透明な笑みを浮かべ、両手を広げてみせた。「えへへー、奮発してなんといいちまーんえーん」

そう言つて、俺の目の前で諭吉をちらつかせた。俺の中で何かが砕け散つた音が聞こえた、気がした。

「前払い？」

「うんー」

紅いマニキュアが塗られた爪から諭吉を受け取り、透かしを確認する。おいおい、本当に本物かよ。

俺は今月の家計事情を思い出す。危機的状況ではないが、それほど余裕があるわけでもない。

「……はあ、仕方ねえ。おら、立てるか？」

「無理。おんぶ」

舌打ちしそうになるのを堪え、屈んで女に背を向ける。体温と柔

らかい感触が背面に伝わってくる。

「わー背中広いー」

「酒臭い口で騒がないでいただきたい。寄宿先はどの辺りだ？ あーと……」

鞆を掴み、立ち上がる。見回したが、荷物はこれだけらしい。言葉の意味に気付いた女が、軽快な声で笑った。

「ああ、アタシは墓越、墓越命。はかこめことコレ、名刺ねー」

手に長方形の紙片を握らされる。所属する会社名も住所も、電話番号さえも記入されていない。本当に名前だけの名刺には、墓越命とだけ印刷されていた。

「珍しい名字だな。本名か？」

「いんや偽名。でも一応ソレで通してるから、『みー子おねーさん』って呼んでくれなきゃヤダ〜ん」

いきなり偽名であることを暴露した女は随分と楽しそうだった。

現金を受け取った以上はこれも料金の内なのだろうと、振り落としたくなる衝動を抑えつける。

「はいはい、分かりましたよ。墓こ」

「みー子おねーさん」

「はか」

「みー子おねーさん」

「は」

「みー子おねーさん」

無意識に右手が握り拳になっていたのに気が付いた。この女は、どうも俺を苛立たせる。屈辱的だが、耐えろ、俺。

「……みー子お姉さん、酔っていても、自宅近くの目印になるような建物くらいは思い出せるだろう。何か無いのか？」

「うっん……、近くにオレンジ色の看板のスーパーがあったと思う。テキトーに歩いてみて。見たことある道に出たら、カーナビみたいに言うから〜」

オレンジ色の看板のスーパー……ああ、ヤスカカのことか。ヤス

才力のある夢乃坂団地なら、ここからさほど遠くない。

「あ、キミは名前なんて言うの？」

「偽名を使うような人間に、本名を名乗るような迂闊さは持ち合わせていないんでね」

酔っ払いと会話を続けながら、迷路のような路地を進んでいく。

「ふふん。じゃー、『ケンくん』なんてどう？ 昔飼ってた犬の名前」なのよ。本当は御剣みつるぎって名前だったんだけどねー、ケンくん、ってアタシは呼んでたのよん。キミにピッタリだと思ってねー」

「俺と犬は同格かよ。まあ、好きにしてくれ。俺にはもうアンタのボケに一々反応する気力がない」

街灯のある開けた道に出る。記憶だけを頼りに人通りの少ない夜道を歩いていく。

「んふふふ、ケンくんケンくん」

「なんですか？ 墓、いや、みー子お姉さん」

「さっきの道、左」

左足を軸に円を描いてUターン。

「……そういうことは、もっと先に言ってくれないと困ります」

顔が見えないのでよく分からないが、反省した様子は窺えない。むしろ楽しそうだった。墓越の陽気に反比例して、俺の気分は沈んでいく。

「ごめ〜ん。あ、ここ右ね〜。ふふふ、次の交差点を、下」

「地下したねえ……どこかに穴でも空いていないものかな。人一人が埋められるくらいのも、でっかい穴」

「あははは怒られちゃった〜」

背中で墓越が喘息患者のようにケラケラと笑った。やはり反省の色は無い。

「ケンくんケンくん」

「はあ、もう今度はなんですか？」

「……吐きそう」

俺の中の時間が凍りつく。

「なあ、真剣に降ろしていいか？」

「ううう、見捨てないでえ……もう少しなら大丈夫だとおをぼぼぼ」

背筋を大量のぬめりとした生暖かい感触が伝っていき、一拍遅れて全身が総毛立つ。

「こ、この女、言った傍から吐きやがった！ しかも、シャツと、肌の間に！」

「う、うおいやあああああ！ お、せ、背中に、おぶつ、汚物がッ……！」

さすがの俺も叫ばずにはいられない。

「うう、ごめん。ビールと一緒にさっき食べたラーメンが出たみたい。エビピラフも出たかも……ん？ あ、こっちの緑のはお漬け物かあ。あはは、こんなにやくがお通じに良いつて本当だったんだね、白滝がまだ消化されてないー」

「細かく説明するな！ 想像力が働いて二乗倍ギモチワルい！ だいたい、何軒ハシゴしたらそんな嘔吐物になるんだよ！？」

夜中だというのに、俺の叫びが住宅街にこだまする。しかしながらこれで叫ばずにいられようか。無理だ。

「アタシ、昔から食べる方だったから、その分胸も大きくなってねー。おねーさんこう見えても結構おっぱいあるんだぞう。んふふ、ほらあぼいんぼいん」

「お願いですから、それ以上喋らないでください。アンタが動く度に、背中に溜まった汚物がその度に浸透していくんです。……あ、ついに腹側まで到達した」

なんだから、この上なく惨めな気持ちになってきた。もはや俺に虚勢を張るだけの余裕は残されていない。

「うぶ、ちよつと落ち着いたみたい。あ、そこ曲がつてすぐのアパート、の二階」

「へいへい……ああ、ここですか。というか、地元の間人だったのかよ」

それは、外見から破格の家賃が想像できるようなアパートだった。住んでいた住人が自殺したとかいう曰く付きの物件だったとしても、何らおかしくなさそうな雰囲気だった。

今時、トイレとか洗濯機が共同のアパートなんて無い、よな……？ 下宿ならともかく。

「あ、自分で歩いて上がる。さっきからクサイし」

「労いの一言も無しかよ」

言いつつもふらつく墓越に肩を貸し、階段を登る。

彼女の指示でプランターの下から鍵を取り出し、解錠。垂れ下がっていた紐を引くと、板張りの玄関が照らし出された。

「ケンくん、どうせならシャワー使ってく？ そんな格好じゃ、お家に帰れないでしょ？」

「まるで他人事だな。そうするけど」

俺は靴を脱いで、墓越に言われるがまま室内に導かれる。

「さあて、まずはその服を脱ごうか。ぬふふふー、よいではないかよいではないか」

残った力を振り絞って抵抗する。墓越は、案外すんなりと諦めてくれた。

自分で脱いでいる間にも、制服の裾からは滴が垂れ続けていた。一刻も早くこれを洗い流したい。

シャツを脱いだ時点で、これ以上は流石にマズいと思い、風呂場まで案内してもらう。墓越がしつこく覗こうとしてきたので、蹴って黙らせた。

そして服を洗濯され、帰るに帰れなくなった俺は、半裸で毛布にくるまり、延々とループする墓越の愚痴を聞かされつつ現在に至る。あはははは、自分から首突っ込んでいるんじゃないか。もう笑うしかない。

「アタシってそんなに老けて見えるのかなあ？ ケンくん、アタシ何歳くらいに見える？」

なんとも返答に困る質問だった。

こういう場合は実年齢を慎重に予測し、敢えてその年齢より二、三歳若く答えるのが社交辞令か。リップサービスだと思って諦めよう。

「ええと、二十は……いや、七？」

「ケンくんの馬鹿ー！ アタシまだ二十六なのにいー！」

若っ。軽い拳で何発か叩かれた。

言えない。無理やりにも若く見せるような口調から、本当は三十路直前だと思っていたなんて、口が裂けても言えない。

俺がシャワーを浴びている間に、背広を脱いでワイシャツとショーツ姿になった墓越が、白磁の脚を投げ出す。無駄に、本当に無駄に、扇情的な雰囲気醸し出していた。シャツの表面に突起が二つ、影を作っているのは、きつと俺の幻覚なのだろう。

「うふふ〜ケンくん、ナニ見てるの〜？ 可愛いなあもっ、お姉さん襲っちゃうぞー？」

意外性が低く、洒落にならない。気が付くと、墓越の顔が眼前にまで接近してきていた。その手が俺の眼鏡を奪う。

「おい、ちよっ、みー子お姉さん？ 眼鏡っ」

「ケンくんつてさ〜、メガネ外した時さ〜、女の子に『意外と可愛い顔してるー』とか言われるタイプなんじゃない？」

そんなことを言われた事など、一度だつてない。楠には眼鏡をはずした状態を「何かパーツ足りない」と言われたが。

毛布にくるまれた状態ではバランスを保てず、墓越に馬乗りになれる。強調された胸の谷間がものすごい磁力を放っていた。そして、心なしか墓越の頬が赤い。

「冗談にしては笑えな、え、嘘？ おい、この腕をどける！ あの、どけて！？」

「ぬっふふふふふふふふ〜」

聞く耳は持たないらしい。俺の訴えを無視して、酒臭い顔がさらに接近してくる。いや、これ以上はマジで洒落にならないっ！

「ぐきゅっ？」

頭部に衝撃。俺は反射的に頭突きを放っていた。

奇妙な声を発して墓越の身体から力が抜ける。当然ながら俺に被さるように倒れてくる女体。

しばらくして、耳元で規則正しい寝息が聞こえてきた。俺は安堵の溜息を漏らし、軽い墓越の身体を退かす。

窓の外から脱力する俺を嘲笑うかのように、鳥の鳴き声が聞こえてきた。立ち上がってカーテンを開けると、既に空は明るんでいた。

背後で爆睡する墓越を見た。思わず殺意を覚えるほどに、気楽な寝顔だった。

誰もいない、静寂の公道。帰路の途中の朝焼けが目には滲みだ。結局の所、謎の酔っ払いに付き合わされて夜を明かしてしまったようだ。

生乾きの服が肌に密着して気持ち悪い。そして寒い。財布から一万円札を取り出し、眺める。

延々と酔っ払いの愚痴を聞かされるなど、苦行以外の何物でもない。

気絶したまま放置して来たが、毛布も掛けてきたことだし、おそらく大丈夫だろう。鍵を灰皿の下に隠してきたのは、ちよつとした仕返しだ。

そんなことを考えている間に我が家に到着。ずいぶん久し振りに感じる。

「ただいま」

そう言っても返してくる人間はいないが、なんとなくの習慣になっていた。

とりあえずリビングの明かりを付け、テレビの電源を入れる。

ニユースは隣の市の里縁さとへんで発生したらしい、例の誘拐殺人事件を報道していた。この事件が取り上げられているとは、珍しいこともあるものだ。

……それにしても、近い。

昨日、夜遅くまで出歩いていた自分が被害者になっていたかもしれないと考えると、怖くなった。

『目撃者の証言と警察から入りました情報によりますと、被害者の女性の死亡推定時刻は昨夜の九時から十時頃。手口の共通点から、警察は一連の事件と同一犯と見て捜査を進めております。以上、現場からでした……』

テレビには、まだ新しい多量の血痕が映し出されていた。犯人はまだ捕まっていないらしい。怖いな。

昨日の九時から十時頃といえば、ちょうど墓越と遭遇した時間なので、当然だがあの人が犯人という事は無いだろう。あれだけの血が飛び散っていたのだから、返り血を浴びない方がおかしい。あの人からは、酒の臭いしかなかったからな。

くだらない思考を停止し、欠伸をする。未だ酸っぱい臭いのする服を、脱いだ先から大きめのビニール袋に詰め込んでいく。

携帯の電池が切れていたので、代えのジョーンズを履きながら自室へ向かう。寝台の枕元の充電器にプラグを差し込むと、充電中を示す赤いランプが点灯した。電源を入れてしばらくすると、メールの着信が一件表示される。新宮しんくうからだった。

詳細が省かれた呼び出し。夕方に柴賀私立武道館へ来いとのことだった。

鉛のような疲労感が外出の意思を妨げているが、酸っぱい臭いの制服をクリーニングに出さなければならぬし、溜まった課題も消化しなくてはいけない。

ベッドに倒れ、眼鏡を外す。目を閉じると、すぐに意識が沈んでいく。

柴賀市営武道館は、県内でも有数の総合武道館である。一階が剣道場、二階が柔道場、屋外には弓道場を備えており、時期になるとそれぞれの大会も行われる。

『威風堂々』

ある有名な書道家の遺墨らしい、清々しく、勢いがあり、尚かつ繊細な筆遣いで書かれた看板を見上げる。

十六時、俺は新宮に呼び出されたとおり、この場を訪れていた。

以前、父の勧めで武道をしていた頃は、姉と毎日のようにここへ来ていたものだ。姉と父が京都に行ってからは何となく疎遠になってしまい、高校受験で時間がなくなったこともあって、ここに来る

のも久しぶりだ。

入り口のドアに手を掛ける。錆かけた蝶番が軋んだ。武道館の奥から竹刀で打ち合う乾いた音が幾つも聞こえてくる。

この武道館では毎週日曜に自由参加の練習会が行われる。練習会には高校生や中学生だけでなく、一般の人も参加が可能なため、相手を求めてやって来る熱心な輩も多い。俺は人に会いに来ただけなので練習会には参加しない。

顔見知りの事務室のおっさんと挨拶を交わす。練習が終わるまでもう少しあるらしい。俺は剣道場の隅に腰を下ろして待つことにする。

昼過ぎに制服をクリーニングに持っていくまでずっと寝ていたので眠くはない。

紺や白の胴着が互いに打ち合う。そんな普通な光景の中に、一際目立つ男がいた。顔は面に覆われていてわからないが、その存在感によって彼は周りとは隔絶していた。あれが新宮だ。

……基本的な刀の柄の握り方は、右手を柄の上部に、小指と薬指のみを締め、他の指は卵を握るように添える。こうすることで、竹刀を振り下ろす際のブレがなくなり、いざという時も対処しやすい。しかし、新宮は右手のみで竹刀を振るっていた。新宮の左腕は、麻痺したように脱力していた。新宮の左腕は、もう何年も前に自由を失っているのだ。

新宮は、今から数年前に交通事故で片腕の自由を失い、同時に弟を失った。数回しか会ったことがないが、生きていれば俺の一つ下だったはずだ。

隻腕の剣士、新宮が構える。右腕にあまり負担の少ない上段の構え。その柄の端を、掴むようにして握る。

一瞬、新宮が竹刀を短く持ち替えた。新宮の姿と、竹刀を握った腕が霞む。

剣道場に心地良い音が響いた。隻腕が放った疾風の一撃。神速の竹刀は、完全に相手の胴を捉えていた。一本だ。

それが契機となったように、講師の一人がその日の練習の終わりを告げた。

掃除の邪魔になると思い、スポーツ飲料ばかりが並ぶ自販機に寄つてから、ロビーまで移動する。長椅子に腰を下ろし、缶から少しだけ飲む。

夕食はどうしようかと考えていると、俺の右隣に腰を下ろす汗臭い塊があった。新宮と縫われた袴、面を外した、先ほどの隻腕の男、しんくたくくみ新宮匠その人だった。

「よ、調子はどうだ？ 衛輔」

「暫定でやや良好。気分が良いとは、とても言えませんが」

新宮が首にかけたスポーツタオルで汗を拭う。短髪で無精髭の顔立ち。顎と額の端の方には、大きな切り傷の痕。背の丈は高く、百八十五以上あった。動かない左腕には傷跡を隠すように、何重にも包帯が巻かれている。

彼は俺がここに通り積めていた頃、兄のように世話を焼いてくれた人物だ。武道と疎遠になった今でも変わらず、いや、あるとき以上に親身に接してくれている。

不器用なりに隠しているつもりなのだろうが、一人暮らしをしている俺のことを心配しているのが、彼の振る舞いからは見え見えなのだった。もしかしたら、限りなく似た境遇の俺を、ただ憐れんでいるだけなのかもしれないが。

なんにせよ、心配してくれていることに悪い気はしないし、何だかんだ言って一人暮らしは心細い。例え弟の面影を俺に重ねているのだとしても、その気遣いが嬉しくはあった。

「それで、わざわざ休日呼びつけたってことは、また例のあれですか？」

「そうだ、よくぞ聞いてくれた」

新宮が新しい玩具を自慢する子供のよう^に目を輝かせ、担いでいた物を下ろす。巻かれていた布を片腕で器用に外していく。

中から現れたのは緩く湾曲した白木。鞘から少しばかり覗く白銀

の輝きは模擬刀ではない、紛うことなき真剣である。

「これは日本でも有数の業物だと、オレは思う。名を宗嶽泰光。むねたけよしみつ以前、剣道連盟の主催で行われた講演会で知り合った、連盟の会長に無理を言って譲って貰ったのだ」

「ああ、新宮さん、結構有名なですからね」

気軽に話しかけているが、新宮はこれまでに警察剣道において、全国大会では上位数十人に数えられるほどの実力者なのだ。

基本的に階級分けが存在しない剣道において、自分より剣道歴が長い相手とぶつかることなどザラだ。それを下し、上位入賞を果たさんとする新宮の実力が相当なものであることは疑いようがない。ましてや、それが隻腕ともなれば尚更である。

新宮が全国大会において初めて活躍したとき、スポーツ紙や週刊誌に大きく取り上げられ、一役有名になった。その時のローカル記事を担当したのが、知り合いということもあって、当時新聞社に勤めていた俺の母であったりする。

「見る衛輔。この滑らかで繊細な波紋を。本当に水面の波のようじゃないか。それにこの刀身の反り具合。とことんまで実用性を追求した日本刀ならではの、物理的な負担を無理なく逸らし、一撃で相手の脊髄まで断ち切る鋭さを……」

恍惚として話す新宮に、俺はどこか危険な臭いを感じた。経験から言っが、これがヒートアップすると俺に竹刀を持たせて「試し斬りさせて、頼む！一回だけ！絶対に寸止めするから！」などと言ってくる。

「試し斬りさせて、頼む！一回だけ！絶対に寸止めするから！たとえば今のよう。勘弁してくれ。」

「あの、新宮さん。俺、この後も予定があるんで、刀自慢が終わったのなら帰っていいですか？新宮さんもその格好のままじゃ風邪ひきますよ」

「……それもそうか。仕方ないな」

「それと、おじさんに挨拶しようと思っただんですが、今日は来てい

ないんですか？」

俺は強引に話題を反らす。

「ん、ああ。親父は昨日、里縁で発生した例の殺人事件について緊急会議だと」

以前、メディアではあまり扱っていない誘拐殺人事件のことを教えてくれたのも現職の警察官であるこの男だった。彼は現場に立ち会ったこともあるらしい。

「ああ、ニュースでやってましたね。日曜なのに、ご苦労なことって。今までも似たような事件がいくつもあつたからな。確か今回で八件目だ。警察は血眼で犯人を捜している」

新宮の父も警察官で、階級は警部。ちなみに新宮は巡査だ。

「人事じゃない。今回のニュースは里縁で起きたが、それ以前の同様の事件は、すべてこの柴賀市で発生している」

「へえ、それは」

知らなかった。

「いずれの被害者も人気がない場所に拉致されたところを殺され、内臓が無惨に撒き散らされた姿で発見されている。凶器は鋭い刃物、犯行の手口から単独犯ではないかと推測されているが……被害者には社会的な共通点が全くと言っていいほど無く、捜査は難航しているというのが現実だ」新宮が嘆く。「残酷な殺し方を実行する理由も、怨恨なら説明が楽なんだがな。そう甘くない」

「怨恨が理由ではない、と？」

新宮は首肯する。以前に何かで読んだが、他人を残酷に殺すことは予想以上に犯人の精神を削ぐらしい。怨恨が目的でもなければ、八人も人間をそれほど残酷には殺せない。犯人の精神は、どうなっているのだろうか。

ふと、楠にした話を思い出した。八人も人間を同じ方法で、残酷に殺害する犯人。そんな奴、本当に人間なのか、文字通りの怪物ぶつなのではないか」。

そもそも、なぜ犯人は手間のかかる殺害方法を実践しているのか。

警察の操作を攪乱させるため、かもしれないが、それならそれでもっと効率のいい、別の手段があるのではないか……分からない。

俺が思考に耽っている、再び新宮が刀を見て色々呟き出したので、俺は逃げるようにその場を去った。

時計を見た。そろそろ制服が仕上がっている頃だ。

まあ、俺に出来る事と言ったら、無駄な犠牲者を増やさないために夜道を歩かないようにするくらいだ。犯行は全部夜中に起きているらしい。

もっとも、俺には関係の無い話だ。警察が本腰を入れて動いているなら、犯人は近いうちに捕まるだろう。そう信じたい。

そして、それで終わりだ。俺は変わらずバイトや友誼ごっこをし、変わらない日常を送るだけ。

そう。そこに、不満もクソも無い。

「ごめんなさいねえ、惟ゆいのためにわざわざ来てもらったのに、おもてなしもできなくて。またいらしてくださいね」

「友達ですから。お邪魔しました」

軽く会釈し、愛想笑いでその場を過ぎす。

楠遥香は疲労していた。こここのところ、不登校になった友人を毎日のように訪ねているのだ。

今日など休日であることを利用して四時間程粘ったのだが、自室に隠って出て来ない友人は、学校へ行こうとしない理由を頑として語らなかつた。

正直なところ、彼女と自分とはあまり仲の良い間柄ではなかつたのだが、ある日突然不登校になった友人を放つてはおけなかつた。自分より彼女と親交のあつたはずの子が無関心を決め込んでいることに対する反抗心もあるのかもしれない。どちらにしる、乗りかかった船を今更降りる気にはなれなかつた。

最初は、彼女と他の女の子の間で人間関係の纏れがあつたのかとも思つた。

女の子のイジメは、陰湿で明るみに表れにくい。もともと人付き合いが上手な方ではない彼女が、理由は何であれイジメの標的にされている可能性は充分にあった。

後ろ髪を引かれるようであり乗り気がしなかったのだが、放課後を利用して彼女の友人関係を洗いざらい調べさせてもらった。

結果的にイジメがあつたという事実は無かつたのだが、少々気になる噂を耳にしてしまい、今日その真偽を確かめようかどうか迷っているうちに、時間が来て聞けず終いだつた。

(……らしくないな)

遥香は、人知れず重い溜め息を吐いた。油断していたのか、背後から接近する人影に気付くことができなかつた。

「ようっ」

「ひゃっ!? え、衛ちゃん? 驚かさないでよ、もう……」

城凧衛輔。遥香自身、自分に最も近いとする友人、が自転車を引いて立っていた。カゴにはクリーニング屋のビニール袋。

「油断しているお前が悪い。辛気くさい顔しやがって」

相変わらずデリカシーの感じられない物言い。もっとも、裏を返せばいつでも等身大で接してくれる、彼の良いところでもあるのだが。

「ああ、最近、お前が放課後になるといなくなる理由か。お前のことだから、友達関係か? よくやるな、本当に」

「……バレちゃったか。あんまり衛ちゃんに心配かけたくなかつたんだけどなあ」

衛輔は「そんなことで俺は心配せん」と言っていたが、いわゆるツンデレなのだろうということにした。

いつもそうしているため、自然と並ぶ。衛輔も自転車に乗らず、歩調を合わせてくれていた。

会話も無く、ただ黙々と家路を歩くしかない。間が嫌に辛く感じられた。遥香は何か話題が無いかと思いを巡らす。

「そういえば、昨日はずいぶん帰りが遅かつたみたいだけど、どこ

に行つてたの？」

沈黙。衛輔にとつてあまり触れられたくない話だつたらしい。

「まあ、バイトの人手が足りなくて、な」

見え透いた嘘だつた。この男はある意味で馬鹿だが、他人に迷惑をかけるような馬鹿は極力控える節度を持っていて、遥香は認識していた。そのため「ふーん、衛ちゃんも忙しいんだね」と言うだけで、問い詰めることは避けておいた。

ふと、先日耳にしたという噂を思い出してしまった。衛輔とは直接関係は無いが、一瞬、遥香はそこに自分と衛輔を投影してしまい、不安になつた。

不安が明確な意識となり、言葉になつて遥香の唇を動かす。

「衛ちゃんはさ、私を裏切つたりしないよね？」

自分でも、何のために衛輔にこんな質問をぶつけたのか分からなかつた。付き合いが長いために、衛輔の答えは容易に想像できるといふのに。

「さあ？ 人の気持ちなんてすぐに変わつてしまうものの典型だ、断定はできないな。……まあ、お前が俺の友人であれば、お前が社会を敵に回すその時まで、俺はお前の側でありたいとは思つが」

そう、城凧衛輔は、こういう男だ。予想通りの、不器用だが真つ直ぐな回答に、遥香はほのかな安堵を感じていた。

そして、気が付くと遥香は地面を眺めていた。

「何を悩んでいるのかは知らないが、後になつて悔やまないよう、お前はお前のやりたいようにやればいい。悩み悔やんでいる顔は、お前には似合わんよ」

薄暗くなつた石茅川いしかやの河川敷を風が流れていく。

衛輔の顔を見上げた。街灯に照らされ、細かい表情が読めないが、口元が笑っているように見えた。

「こうしておけば良かったのに、あの時違う判断をしていたら。……それではなにもかもが遅い。仮定と未練で編まれた妄想を堂々と語るなど、他人の同情を誘うだけの自己満足、あるいは自らの無能

を棚に上げた頭の悪い自慰行為に等しい。有りもしない『たられば』の妄想など、頭の端よりまだ隅の、奥の底にでも仕舞っておけばいいんだ」

衛輔は淡々と述べていく。

「たとえ取り返しのつかない失敗をしたとしても、俺は何かし責任を擦り付けるような醜い自己弁護や、非生産的な後悔、昔は良かったなどとはざくだけの懐古主義者にはなりたくない。特に、後悔はそれだけでそれまでの行為や努力を無価値にしてしまう。

だからこそ俺は、いや、本当は誰もが、現在の現実を大切にしなければならぬ。過去はもはや触れられず、未来は未だ来ず……誰も現実を受け止めて、現在を生きるしかない」

衛輔は直接口に出して言いこそしていないものの、本当はこの世界を憎んでいるということ、言葉の端々から、遥香は鋭敏に読み取っていた。それは、衛輔の言葉と完全に矛盾していた。

(私には、分からないな……)

遥香には、親友の考えていることが分からなくなる時があった。

淡々とした衛輔のそれは、まるで自分にそうであることを強いているような印象を与える。他者と自己の間に絶対的な壁を作り、押し込めた何か溢れ出すのを必死に防いでいるかのような、そんな印象を。……いや、ような、ではなく、実際にそうなのだろう。今の衛輔の言葉を聞いて、遥香はそれを確信に変えつつあった。

「結局、昨日と似たような話になっちまったな。同じ話を二度もすると、愚痴っぽいな」

締め括り、衛輔は自嘲気味に笑みを浮かべる。そんな衛輔の横顔が、遥香には現実的で、また刹那的であるように見えた。同時に、触れ得ざるもののように、とても危ういもののようにも感じられた。だがその表情は、遥香が瞬く間に消え失せてしまっていた。

「先も言ったが、お前には辛気臭い顔が壊滅的に似合わない。だから俺は、お前が悔やむようなことをしてほしくない。お前には、いっつも笑っていてほしい」

「うつわー、そんな恥ずかしい台詞、よくサラリと言えるね。言われたこっちが赤面しそっだよ」

「は、んな意図が無いことくらい分かっているだろうが。一々反応するなよ、馬鹿馬鹿しい」

衛輔に照れた様子は無い。遥香に笑っていてほしいと心から思い、それを口にしただけなのだ。

ときにこの男は、素でこんなことを言っただけのける。悪意がないため、言われた側はかえって対処がしづらいということ、本人は自覚しているのかいないのか。

「……………ん？ おい、ハル、見ろ」

不意に衛輔が子供のような声を上げ、遠くを指さす。何かと思っ
て視線を向けると、この辺りでは有名な桜並木があった。灯籠のよ
うに並ぶ桜が、役目を終えた花弁を風に散らしていた。

「わあ、すごい……………」

文字通りの桜吹雪が、眼前に広がっていた。

遥香の口から、思わず感嘆が漏れた。駆けていって、桜の下で遥香はくるくると回る。

もしかしたら、遥香の質問に対する言葉は、衛輔の自戒のようで、自分にも向けられていたのかもしれないと遥香は思った。元気が無いように見えた自分を気遣ってくれた、衛輔なりの励ましなのだろう。やはり、かなり不器用なところはいつまでも変わらないが。

遥香にはそんな衛輔をこそ好ましい。これでこそ自分の親友なのだ、そう思う。

「おいおい、はしゃぎすぎて転ぶなよ」

追い付いた衛輔が、遥香の頭に軽く手を乗せた。遥香は子供扱いをされているようで、他人に頭を撫でられるのは好きではない。

だがこの行為には、恋愛感情などという野暮なものではない、それとはまた違う親愛の意味があることを遥香は知っていたため、嫌がらずにそうしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2391h/>

月亡：アルタード

2010年10月8日15時27分発行